

「かっぱの服」

(株)有隣堂 原朝子

ほんの少し前のお話。とある海の近くの町に大きな本屋さんがありました。

その本屋さんには、絵本や童話がたくさん。「僕を読んで!」「いいや、私よ!」本たちが騒ぐものだから、お店は毎日子どもたちが集まってしっちゃんかめっちゃんか。

この店の児童書の番人の一人に、朝子という娘がいました。丈夫な体が自慢でしたが、めくるめく日々には頭はぐるぐる、目はちかちか。一緒に猪のように走り回って、いつの間にか終電を迎えることもしばしばありました。

そんなある日、一人のおばあさんが朝子さんにごう尋ねました。「かっぱの服 置いてありますか?」かっぱの服は、ありません。ふつうは、「当店は洋服のお取り扱いがございません」の一言で終わるのですが、朝子さんはなにやら楽しくなってきました。かっぱの服? わくわくするではありませんか。

おばあさんの話によると、お孫さんが幼稚園のお遊戯でかっぱの役をやることになったが、お母さんは仕事で忙しくて作る暇がなく、おばあさんに白羽の矢が立ったとのこと。でも、どの店に行っても「お取扱ございません」と追い払われて、ここにたどり着いたというのです。なんとも冷たい世の中ではありませんか。朝子さんは、どうにかかっぱの服をつくるヒントを探そうと心に決めました。そして二人はかっぱの服探しの旅に繰り出したのでした。

何かを作るには、教科書を探すことです。まずは実用書売場で、お遊戯の服作りの本を探しました。しかし、どの本にもかっぱの衣裳はありません。近いものが載っていても、おばあさんにはしっくりこないようです。困り果てたその時、おばあさんの「そもそも、かっぱはどんな生き物だったっけ?」という一言が道しるべになりました。

さて、冒険の舞台は児童書売場に移ります。いろいろな妖怪図鑑を見てもしっくりきません。

「なんだか、こう、もつと恐ろしくて優しい生き物なのよ」

おばあさんの言葉を聞いて一冊の絵本が頭に浮かんだ朝子さんは、『おっき赤ちゃんとかっぱ』という絵本をおばあさんに差し出しました。するとおばあさんの顔はみるみる輝き、「これ!」と叫びます。そして、何とということでしょう。どこに隠れていたのか、おじいさんがひよっこり現れ、「見つかった?」なんていうものだから、声を合わせて笑ってしまいました。

買ってくれた絵本を見ながら、かごは1階の300円均一、ゴムは3階のユザワヤで…、と店内ガイドに丸を付けて、朝子さんは一人とお別れしました。振りかえれば台車には荷物の山、子どもたちに荒らされた売場が待っています。けれど怖いものはない気がしました。

今でも、慌ただしい日々の中で時間泥棒にやられそうになる時、朝子さんはこのことを思い出します。後日見せてくれた写真には、ちよつと照れているお孫さんが…。思い出せば、心に血が流れるような気がするのです。

本屋さんには老若男女、いろいろな人がみんな何かを探しにやってきます。探していたものが見つからなくても、本屋を探検し、そこで一冊を見つけて、ぱつと笑顔になり、その一冊が何かに変わり、誰かに伝わる。短い時間の中で一冊でも多く本を売るのが仕事ですが、根っこにはこの感覚を忘れないでいようと、朝子さんは今日も台車を転がすのでした。